

とかく内容が堅苦しくなる研究雑誌を広く市民の皆様に読んでいただく為の方途として「市民の広場」を設けましたが、周知の通り、これが大変親しまれ多くの読者層を得た原因にもなったそうです。編集の一端を荷なったにすぎませんがこれ以上の喜びはありません。私事で恐縮ですが、私設文庫の「奈麻余美文庫」を季刊発刊しておりますが、その基本精神を『市史研究』から学び取りました。レイアウトを大切に、校正に念を入れること、簡単なようですが大変根気のいる仕事です。

『市史研究』第六号には私の「愛媛の近代建築のルーツを探る」と題し、小論文とまではいかないまでも、レポートが掲載されました。藤村式建築と呼ばれ山梨の近代建築の第一人者、大工・棟梁小宮山弥太郎が愛媛の近代建築（愛媛師範学校）を建てた事実をいろいろな文献をあさり調査した結果を報告したものです。発刊後数カ月して、松山市の近代建築史を研究するグループから電話を受け、これがご縁で、御地におもむき、山梨の近代建築が愛媛の近代建築に大きな影響を及ぼした講話をする機会を得たことはこれまた私の喜びとするところです。このグループとは、その後も資料や情報交換を積極的に行い研究を重ねて居るところですが、火種をつけてくれたのもこの「市史研究」のお蔭だと思っております。

「市史研究」第五号は、武田氏特集で誠に読みたえのある特集号でした。磯貝正義、中沢信吉、服部治則、斎藤典男、守屋正彦、柴辻俊六ら各委員が健筆をふるい、論題も単に歴史の範囲にとどまらず考古や軍学芸術など多岐にわたり、好評で大変な注文が相ついただと聞き及んでおります。私も県内外の知人、友人から頼まれ何回も郵送したことを思い出します。一冊一冊は薄い冊子ではありますが

が、全十巻の記述内容は大著に劣らずまさに甲府の歴史そのものであり、将来、学究の徒はもちろん広く市民に愛読されんことを切に願う感想の一端といたします。

### （市史編さんを終えて）

専門委員 守屋 正彦

甲府市というのは山梨県の中心としての歴史が極めて長く続いて来たところで、その中でも政治的な中心としては武田信虎以降、現在までということになる。

特に甲府が政治的中心となった室町末から近世、近代にかけての文化が隆盛を極めたのも、この政治的中心と呼応していると考えられる。私の担当した美術・工芸の分野では余り、近世上の特色を強く指摘できなかったが、市史調査を経てのさまざまな資料の発見は、今後に大きな甲府の文化を考える重要なものとなるであろう。

ブルクハルトが著わした『世界史的考察』という本には文化が成立する三つの制約として、政治的制約、経済的制約、宗教的制約の三つを指摘している。この構図は私が文化史、あるいは美術史を考える上で大変参考となったが、『甲府市史』を執筆するにあたって、私にとってははじめて、美術史的な流れを意識する上で念頭から離れることはなかった。

私にとって市史調査で最も想い出深い発見は、一蓮寺の「妙沢不動」との出会いであった。

甲府を中心とした山梨県は、指定文化財の優品に見るならば、平安末からの中世文化が隆盛の地で、その文化財は東国においては質